

滋賀短期大学 令和6年度入学式 学長式辞

今年は桜の咲くのがいつもより遅く、大学の正門にある桜が昨日からようやくほころび始めました。琵琶湖の北の菅浦でも桜が咲いたというニュースを今朝聞きました。明日、皆さんが登校すれば、大学の桜も皆さんが来るのを待っていたように咲いていると思います。

新入生のみなさん、入学おめでとうございませう。ようこそ滋賀短期大学へ入ってくれました。教職員、在校生一同、心から歓迎しています。

保護者やご家族のみなさんも、おめでとうございませう。昨年から入学式はこの大津市民会館で行うようになりましたので、皆さまにもゆっくりとお入りいただけるようになりました。お子様たちの晴れ姿、よくご覧ください。

そして本日、みなさんのために、ご多忙の中をご臨席いただいているご来賓の方々にも心から御礼を申し上げます。日頃から厚いご支援をいただいております、本当にありがとうございます。

さて明日から皆さんは希望された各々の専門分野に従って勉学を進めていくこととなります。これからの2年間で、その専門分野に応じて資格や免許を取り、しっかりとした専門的な力をもった社会人として、巣立っていってくれることを、私達も期待しています。本日お越しの保護者の方も同じ思いをおもちだと思ひます。しかし今日はこの滋賀短期大学で勉強をするにあたって、各々の専門分野だけではなく、すべての学生の皆さんに共通して考えてほしいことを話したいと思ひます。

今年のお正月、能登半島で大きな地震があり、大変な被害が生じたことはまだ記憶に新しいところだす。皆さんのお知り合いの中に被害に遭われた方もあるかもしれませう。現在も必死の復旧作業が続いていますが、元通りの地域の生活を取り戻すまでにはまだまだ長い時間がかかりそうだす。

それでは皆さんがこれから学ぼうとしている専門分野から、この災害に対してどのような支援ができるでしょう。例えば生活学科に入り栄養士の資格をとった人は、様々な教育現場や施設で困っている人たちに適切な食事を提供する力をもつでしょう。またおいしいお菓子をつくることのできる人は、疲れはてている被災者や救援に駆けつけている人たちに、ほっとするひと時を提供できるのではないでしょう

か。このようなことはビジネスコミュニケーション学科やデジタルライフビジネス学科、そして幼児教育保育学科でも、各々身につける専門性すべてに対していえることです。

ただ災害を受けた地域の復興というのは大変複雑で、多面的あるいは総合的な支援が必要です。まず道路を修復したり家を建て直したりしなければいけません。それには何よりも土木や建築の専門家が必要です。さらに生活のための物資を被災地に行きわたらせるためには流通や運輸の専門家が必要です。また長引く避難生活で心身に問題を生じる人のために、医療・福祉や心理学の専門家が求められます。

しかしこれと同時に必要なのは、個々の分野の課題を総合し、多面的に判断し、全体がスムーズにまわり、必要な個所に必要な措置ができるような計画をたてて実行していくマネジメントの力です。学問分野としては災害学、防災科学などという専門分野があり、災害社会学、社会安全学、危機管理学などをうたう学部や学科が最近多くの大学で設けられています。しかしこのような複合的な分野の専門家がたくさんいるわけではありません。

実際の仕事としては国や自治体で働く行政の担当者が担う仕事になるのですが、それぞれ一定の専門性をもちながら、目の前にある災害の現実に対しては、その限定された専門性からだけではなく、総合的に現状を把握し、今やらなければならないことは何か、そのためにどう動けばよいのかについて議論できる力をもっていなければなりません。それは立場が保育士であったり、病院の医療事務であっても同じです。今日の前にある現実を、自分の持つ専門性を通して考えると共に、自分の持っている専門性とは離れても、今必要なことを感じ取り、それをどうすればいいのかという問題提起ができる力をもってほしいと思います。

本学では2年前に生活学科とビジネスコミュニケーション学科を関係させて、デジタルライフビジネス学科という学科を立ち上げました。今年も28人の新入生を迎えることができました。この学科は、デジタルの時代にふさわしい教育内容を実現しようと工夫をして作った学科ですが、作るにあたって考えたのは、生活学科やビジネスコミュニケーション学科が持っている特性を、お互いに結びつけることによって、一つの学科では実現できない学科の枠を超えた新しい専門分野を創りだすとともに、そのことがこれまであった学科にも刺激を与えて活性化することを目指そうとするものでした。

今私たちはこの方向をより進化させて、来年令和7年度からは、現在の生活学科、ビジネスコミュニケーション学科、デジタルライフビジネス学科といった学科の枠をはずし、名前は同じですがデジタルライフビジネス学科にまとめ、これまであった専門性をふまえた教育内容を維持しながら、現実の多様性により柔軟に対応できるような組織に改組することを考えています。形ができるのは来年度からですが、今年の新入生の皆さんにも自分の属している学科のもの以外にも、色々な学びがあることを知ってほしいと思います。

そのためには授業を受けるにあたって、専門科目ではない共通科目も、大事な科目だと考えてください。大学によっては教養科目とカリベラルアーツというように呼び方をしているところもありますが、専攻する専門分野に直接関連しないけれど、幅広く世界や人間、社会のことを、自然科学から人文学までいろいろな学問領域の観点から学ぶ科目です。これは専門学校などにはない、大学だからこそ学べる科目なのです。専門性を高めるためにもよく選んで履修してください。そして大学で開講されている科目以外。文学や芸術にも含めていろいろな事柄に関心をもってください。

もうひとつ皆さんにお願いしたいのは、是非社会に関心をもって目を向けてほしいということです。社会といっても身近な地域社会から、少し離れた日本各地の社会、さらには遠く離れた外国の社会もあります。ここで私が社会に関心をもってほしいというのは、災害や事故、紛争や戦争など、大きな出来事に対してだけではありません。いうまでもなく今の世界には人間の力ではどうにもならない自然災害だけではなく、ウクライナでの戦争、パレスチナでの紛争など、新しい戦争の時代がやってくるのを思わせるような事態が生まれています。このような事態に対しても、常に目を向けておいてほしいと思いますが、それだけではなく、大きなニュースにならなくても、私たちの目が届く範囲にさまざまな問題や課題があり、それに対して一生懸命取り組んでいる人たちがいます。私たちが学ぶことができる材料は、ほんとに身近なところにたくさんあるのだということに気づいてほしいと思います。

さて今年、西暦2024年です。皆さんが卒業するのは2026年の3月ということになります。即ち皆さんはちょうど21世紀の4分の1の時期に、この短期大学に在学することになります。21世紀になったのがついこの間のように思っていたの

に、もう4分の1が過ぎたのだと思うと、時の過ぎる速さに驚かされます。そして私のような年代のものは、今度の新入生の大部分の人が21世紀に生まれた人なのだと思うと感慨深いものがあります。私などは、20世紀の前半の最後の年に生まれていますから、ほとんど20世紀の後半50年を生きてきて、そして21世紀の前半を加えているという人生ですから、とりわけ純粹に21世紀だけを生きているという皆さんがこれからどんな世界を生きることになるのか、豊かな未来がきっと来るだろうという期待と、このままで大丈夫なのかなという心配と、両方の気持ちがあります。

少し歴史を振り返ると、今から100年前の1925年前後、世界は第一次世界大戦が終わって、いわゆるヴェルサイユ体制という安定した国際関係が成立していた時代でした。日本は大正が終わり昭和の時代が始まりました。世界は好調な経済で湧き上がっていました。しかし間もなくアメリカ株の大暴落から始まる世界大恐慌の時代に突入し、続いて第二次世界大戦が始まります。

21世紀の今日、20世紀と同じような歴史が繰り返されるはずはありませんが、終わったはずの冷戦の時代がまたやってきそうな気配があるのは確かです。このような大きなことに対して私たちができることは限られています。しかし私たちは考えることはできます。そしてそれを身近なところで自分の立場を通じて何かを実現することはできます。Think globally, act locally. 地球レベルで考え、身近な地域のレベルで行動する、というスローガンがあります。私たちにできることは何か、身近なまわりにたいして自分の力を通じて貢献できることは何か、これからの勉強を通じて皆さん自身で考えてください。21世紀は自分たちの時代なのだ自信をもって。

令和6年4月2日

純美禮学園理事長・滋賀短期大学学長

秋山元秀